

映画「500 ページの夢の束 (Please stand by)」について — 自閉症スペクトラムの障害を持つ方のライフタスク (発達課題) にうなずく —

木澤 健司

東京都立水元小合学園 自立活動室

「500 ページの夢の束 (Please stand by)」は、多くの映画監督が演技力を高く評価するダコタ・ファニング主演のアメリカ映画です。

自閉症スペクトラム障害を持つ主人公のウェンディは、映画「スタートレック」に関する質問に対し電子辞書のように正確に答えることができます。その「スタートレック」の脚本コンテストがあり、ウェンディがオリジナル脚本を作成し、映画会社に届けるストーリーです。

ウェンディは、すでに母が亡くなり、姉オードリーと二人だけの家族です。そのオードリーが結婚し子供が生まれ、夫の仕事の関係でサンフランシスコを離れることとなります。サンフランシスコの生家から離れる説明をするためにウェンディが生活するグループホームに行きますが、ウェンディは脚本コンテストの賞金で家に戻ると叫び、家に帰りたくないとパニックになります。オードリーは、困惑しながらも自宅に戻り、幼少のころのVTRを再生します。オードリーが、テーブルにフォーク・ナイフ・お皿の並べ方を教えようとするウェンディがパニックになり頭を叩いて走りまわる様子、そして、次のシーンはピアノの連弾が始まったところでウェンディが笑顔になりオードリーが喜ぶところ。

ウェンディは気持ちが落ち着かないまま、脚本投函の〆切日を逃してしまい、サンフランシスコにあるグループホームから抜け出してロサンゼルス映画会社までバスで向かい始めます。

行方不明となったウェンディをグループホームの寮母スコッティが、「スタートレック」の質問を息子に浴びせながら車を走らせ、姉オードリーも電話でスコッティに不安をぶつけながら捜索を行います。

オードリーは、グループホームでパニックとなった

ウェンディをそのまま残し、言葉をかけることなく帰宅してしまったことが気掛かりでなりません。

捜索している中、偶然理解のある(?)警察官に保護され、ウェンディはオードリーと寮母スコッティと再開し、ロサンゼルス映画会社に向かいます。しかし、映画会社のオフィスに入り込み原稿を渡そうとしたところ、消印がないことを理由に受け取れないと担当者から説明を受けます。そこで、ウェンディは「私もチャンスが欲しい、ほかの人たちと同じように」と語気を強めます。

そして、サンフランシスコに戻る途中、姉妹は落ち着いて二人で話をします。

ウェンディ「iPodを盗まれたの」

オードリー「買ってあげるわ」

ウェンディ「本当? すごく助かる」

オードリー「ウェンディ 私 ずっと考えてたの とも知りたくて ママが何を望んでたか」

ウェンディ「ママは死んだ、だからもう何も望んでいない」

そして、新しい姉妹の関係が築かれていきます。

「もっとも個人的なことこそが、もっとも普遍なことなのだ」(心理学者 カール・ロジャース) という言葉を思い出しました。多様化が進む社会の中で、分断された社会に向かっているのではなく、普遍的な社会に向かっていると思わずにはいられません。

「500 ページの夢の束 (Please stand by)」は、ウェンディとオードリーの『もっとも個人的なことだわりのある』生涯に関して、楽しいエピソードを入れ込みながら、うなずきながらテンポよく振り返ることができる作品です。

そして、映画を観た私からは、各家族、各兄弟・姉妹のもっとも個人的なことこそ大切にしていきたいと願いながら、ご紹介を終わらせていただきます。

東京都立水元小合学園

〒125-0032 東京都葛飾区水元 1-24-1